様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月 ２９ 日現在

機関番号：２７４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2021～2023
課題番号：２１Ｋ０２６３４

研究課題名（和文）新たな地域志向教育のための大学生の地元就職決定要因の定量的研究

研究課題名（英文）A study on factors determining local employment of university student for new community-based educationstudent for new community-based education

研究代表者
津曲　隆（tsumagari, takashi）

熊本県立大学・共通教育センター・教授

研究者番号：９０１６３８８１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：大学の地域教育の成果として大学生の地元就職率向上が期待された。しかし、地元就職に対して地域教育の効果はほとんどなく、大学生の就職先決定に重要な役割を果たしていたのは他者であった。特に重要な他者は両親または兄弟であった。地域教育の長期的な教育効果を明らかにするために地域教育を受講した卒後１年目から16年目の卒業生に対する調査を行った。その結果、地域教育は、「他者の話を聞くことの重要性」「地域の人と課題解決した経験」「報告・連絡・相談（コミュニケーション）の重要性」「地域の魅力発見とその可視化経験」「地域についての深い理解」という点で卒業後の社会人に対し有益であることがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
大学の地域教育は全国の大学に普及・定着しており、これにより、大学生の地元就職率向上が期待された。このことから、地域教育は大学生の地元就職を促すのかという問いは高等教育のアウトカムとして研究対象となっていた。本研究の成果は、この問いに対してひとつの解答を提供するものである。また、地域教育は社会人となった卒業生にどのような影響をもたらすのかという問いは教育の長期的影響という点で学術的に興味深い問いである。本研究ではこの問いについても一定の知見を得ることができた。これらの知見は、今後の高等教育における地域教育設計において有用なものとなるであろう。

研究成果の概要（英文）：The university's community-based education was expected to improve the local employment rate of university students. However, community-based education had little effect on local employment, and others played an important role in the university students' employment process. The most important others were parents or siblings. In order to determine the long-term educational effects of community-based education, a survey of graduates from the first to 16 years post-graduation who had taken this course was conducted. As a result, we found that community-based education is beneficial for working adults after graduation in terms of the following five points: the importance of listening to others; experience of solving problems with local people; the importance of reporting, contacting, and consulting (communication); experience of discovering and visualizing local attractions; and deeper understanding of the local community.

研究分野：higher education

キーワード：地域志向教育　地元就職　大学生

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

2013 年に文部科学省「地（知）の拠点整備事業大学 COC 事業）」がスタートした。この事業は、大学を地域社会と協働して地域課題を解決していく「地域のための大学」へと転換を目指したものであった。COC 事業は、地域課題の理解及びその解決を実践する地域志向教育（以下、地域教育）を多くの地方大学において定着させ、大学における地域教育を推し進める役割を果たすことになった。さらに後継事業である「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」がスタートすると、大学には従前以上に地元に人材を供給する社会装置としての役割が期待されるようになった。

こうしてこの時期、地域教育は学生の地元就職を促すのかという問いが、高等教育のアウトカムのひとつとして研究対象になり始めていた。研究代表者は、研究開始直前、地方の公立大学（熊本県立大学）に勤務し、COC+事業の下で地域教育のカリキュラム開発を行い、地域に密着した地域教育を担当してきた。そこでは、地域課題解決に向けて大学生の地域でのフィールドワークを重視していた。これは多くの大学でも同様であった。地域教育を実際に担当し、大学生と日々身近に接する中で、大学生の地域課題への理解は向上し、そして卒業研究での地域課題解決等を通し学生の地域愛着度は従来に比べ高まっていることを実感していた。実際、大学生を対象にした調査によれば、地域教育により学生の地元への愛着度向上は見られることが示されていた。しかしながら、それが実際の地元就職には必ずしも繋がっていないこともまた先行研究で明らかにされていた。

大学生の地元就職決定については地域教育ではなく他の要因が強く影響していることは明らかである。もしそうであれば、地域教育は、地元就職に向けての意識向上を目指すということではなく、地元に就職し活躍していく地域人材育成に向けての有益な教育プログラムとなるように見直していくことも必要であろう。新たな地域教育を設計していくためには、就職に向けた大学生の思考様式や行動特性、さらには社会人として要求されるスキルに対する地域教育の役割等を明らかにしておく必要がある。しかしながら、これまで、ここで問題にしている点についてはほとんど明らかになっていなかった。

地方大学は、地元に人材を供給する社会的重要拠点である。地域教育の持つ意味を明らかにできれば、地域人材育成に向けて大学でどういったアプローチを採れば良いかについての知見を提供できる。

２．研究の目的

大学の地域教育は地元就職に対して大きな影響は与えておらず、それゆえ大学生のキャリア選択には他の要因が強く影響していることが示唆されていた。例えば、大学での「インターンシップ」、「キャリア教育」、「企業研究」等が影響しているかもしれない。高校以前の経験が強く影響している可能性もある。高校生は、ある時、大学の学部・学科選択を迫られるわけで、その際の「進路研究」を契機に将来のキャリアに関する意識形成が促され、それが大学卒業時まで継続することもあり得る。あるいは、恩師に憧れ地元教師を目指すといった「他者からの影響」、さらには「家庭環境」といった要因等も看過できない。大学生の地元就職という選択には、これらの要因が単独あるいは相互に影響していることが予想され、大学生のキャリア選択を明らかにすることは、大学での経験の調査だけでは十分ではないと考えられる。高校までの経験にも調査を拡大することが必要である。

本研究は、これらのことを踏まえ、高校時代の経験までも調査の対象にして、地方大学を卒業し、その後も地元に留まって社会人としてのキャリアをスタートさせる学生とはどのような思考特性や行動特性を持つ学生なのか、そしてキャリア選択はどのような要因に規定されているのかを明らかにすることを目的とする。また、社会人となった後に地域教育はどのような影響を与えているのかも興味深い問いである。本研究ではこの点についても調査を行い、地域人材育成に向けて新たな地域教育構築に向けた基礎的知見を提供する。

３．研究の方法

本研究では、職業選択が限定される傾向の強い理系学生よりも地域教育の影響が大きいことが予想される文系、特に社会科学系学生を対象に、進路に関する意識調査を行う。これを通して大学生の進路意識を明確にする。大学生が進路を決定するのは様々な要因が影響しているだろう。図１に想定される要因を示す。

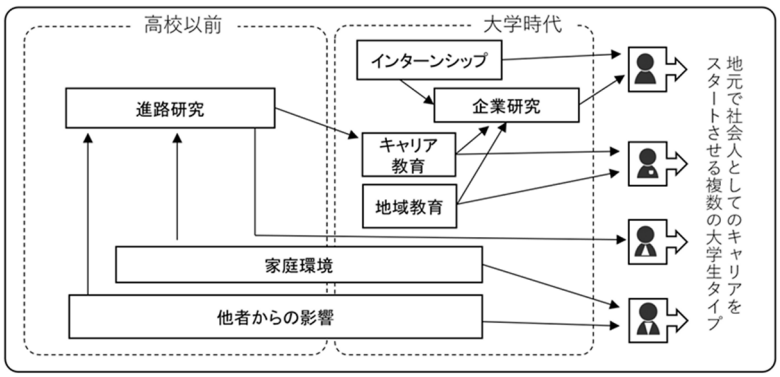

図１　想定される大学生の就職先決定要因

図１に示す各種要因の中で、地域で社会人としてのキャリアをスタートさせる学生に対し、大学時代及び高校までのどのような要因が影響し、地元を就職先とするキャリア選択に至ったのかをインタビュー調査を通して明らかにする。なお、調査は、関東・関西等の大都市圏に就職する大学生についても行う。それらの大学生との比較を通して、地元就職する大学生のキャリア選択の特徴を明確にする。また地域教育が社会人に与えている影響を明らかにするために、地域教育を受講した大学卒業生を対象にアンケート調査を行う。

４．研究成果

大学生の就職先決定において、高校時代にどのような意識を持っていたかを把握するため、高校時代にどのようなことを考え、大学への進路を選んだのかを公立大学１年生を対象にアンケート調査を 2022 年度に行った。調査は、大学入学１カ月以内の時期に行った。人文系学部 103 名、社会科学系学部 295 名、理系学部 119 名の合計 517 名の対象者から人文系学部 83 名、社会科学系学部 256 名、理系学部 103 名の合計 442 名から回答を得た。その結果、理系学部に比較して将来の職業との関係性の弱い人文系と社会科学系の文系学部では６割の学生が将来に対する意識を持たないまま進路選択を行っていた。さらに、理系学部であっても４割近くの学生は同様に将来に向けたキャリア意識を持っていないこともわかった。また将来的にどういった地域で働くことを望むかという問いに対しては文系学部１年生においては 55%が県内か九州エリアを希望し、未定の学生は 20%程度であった。理系学部については、県内か九州エリアが 37%、未定が 35%という結果であった。文系学生

は理系学生に比べ地域志向が強い傾向にあった。

前年度の 2021 年度にも入学後１か月以内の時期に社会科学系学部１年生 288 名について同じ調査を行った。そして 2022 年度に、これらの学生が大学２年次を終了する 2023 年 2 月に再度調査を行った。２年生からは 213 名から回答が得られ、この中の 188 名は１年次調査を行った学生である。これらの学生は１年次に全員が地域教育を受講している。188 名について、大学での２年間の生活を経過した後の意識変化を調べた。学生がモデルとしている他者についての問いに関して、芸能人・俳優・スポーツ選手といった距離的に遠い位置にある他者をモデルとしている比率が 49%から 39%に減少し、これに対し家族をモデルとしている比率は 31%から 43%に増加、また先輩･同級生をモデルとする比率は 22%から 43%へと倍増していた。このことは、高校時代には遠い位置にある他者を漠然としてモデルとして設定していたが、大学での２年間の経験を経て、モデルが具体的な他者へと変化していることを示している。また、どういった地域で働くことを希望しているかという問いに対しては、地元（熊本県内）との回答は 31%から２年後に 36%と微増していた。地元での就職を希望する学生に対し、自由記述によって理由を聞いた。住んでいる地域を離れたくないという理由が散見された。

大学生のキャリア選択についての要因を探るため、大学４年生及び社会人１年目、２年目の卒業生と３グループを対象にインタビュー調査を行った。各年代グループ５人ずつ、合計 15 名にインタビューした。調査者の選定は、県内・県外就職及び男女といった条件を考慮して協力依頼した。表１は調査対象者のプロフィールである。大学４年生の調査は就職先を決めた後に行い、また表１に示す初職所在地は社会人となった後にヒアリングしたものである。

表１の地域についての 3 区分は、「地域（狭）」は出身県内での就職希望を意味し、「地域（広）」は近隣県の範囲での就職希望を意味している。「広域」は特定の就職地にこだわらない学生である。調査協力者としてこれら３つの地域区分が含まれる学生及び社会人を選定した。

表１　調査協力者（調査期間：2021 年 11 月～2022 年 1 月）

協力者	年代分類	年齢	性別	兄弟	大学時の居住形態	希望就職地	企業等本社所	初職所在地
A	４年生	21	男	2(1)	1人暮らし	広域	地域（広）	地域（広）
B	４年生	22	男	2(1)	家族と同居	広域	地域（狭）	地域（狭）
C	４年生	22	女	2(1)	家族と同居	広域	広域	地域（広）
D	４年生	22	女	2(2)	家族と同居	地域（狭）	地域（狭）	地域（狭）
E	４年生	22	女	3(1)	家族と同居	地域（狭）	地域（狭）	地域（狭）
F	社会人１年目	22	男	2(2)	家族と同居	地域（狭）	地域（狭）	地域（狭）
G	社会人１年目	23	男	2(2)	家族と同居	広域	広域	地域（広）
H	社会人１年目	22	女	3(1)	家族と同居	地域（広）	地域（狭）	地域（狭）
I	社会人１年目	23	女	2(2)	家族と同居	地域（狭）	地域（狭）	地域（狭）
J	社会人１年目	23	女	2(1)	1人暮らし	地域（広）	広域	地域（広）
K	社会人２年目	23	男	3(3)	家族と同居	地域（広）	地域（狭）	地域（狭）
L	社会人２年目	23	女	1	家族と同居	地域（狭）	地域（狭）	地域（狭）
M	社会人２年目	24	女	2(2)	1人暮らし	広域	広域	広域
N	社会人２年目	24	女	2(2)	家族と同居	広域	広域	広域
O	社会人２年目	24	女	3(1)	1人暮らし	地域（狭）	地域（狭）	地域（狭）

※兄弟欄の数値は兄弟数と括弧内は本人が第何子かを示している。

調査期間の中で調査協力者にそれぞれ１時間程度のインタビューを行い、トータルで 12 万文字程度のインタビュー記録を収集した。この記録により、県内就職及び県外就職を決め

た学生の思考様式について定性的な分析を行った。その結果、社会人としてのキャリア選択について大学教育と家庭環境（両親の就職経験、兄弟姉妹との関係性等）は、後者の影響がかなり大きく、学生の就職を左右する最も大きな要因は他者であることがわかった。

収集したテキストから就職先決定に関して抽出したエピソードの中に大学での地域教育が登場することはなかった。これは、地域教育が地元就職に寄与しないという先行研究を支持する結果である。大学生の就職地決定に影響を与えていたのは他者であり、特に家族の存在であった。これは地元就職だけでなく、地元外への就職者についても同様であった。プライベートな生活あるいは大学生活等で出会った他者が調査協力者の就職地決定において最も影響を与える要因となっていた。上で述べた追跡調査で、大学生活２年間を通して大学生に影響を与える他者は抽象的な存在から具体化していく傾向にあった。ヒアリング調査を通し、他者の存在は就職先決定の段階になると非常に具体化しており、その具体的な他者から大きな影響を受けていた。

インタビューから、就職について真剣に考え、進路を決定するのは全員が大学 2 生後期から大学 3 年生にかけての時期であることがわかった。この時期までに、学生は地域教育だけでなく、様々な正課内教育を受けている。しかし、それらが大学生の就職地決定の際のエピソードとして登場することはなく、就職地決定に強い影響を与えているのは他者である。この意味で、大学生が大学時代にどういった他者と出会うかが非常に重要な意味を持つ。地域教育を今後考えていく上で、この視点は十分に考慮しておく必要があるだろう。

大学生の就職地選択に大学の地域教育はほぼ影響を与えていなかった。ただし、このことは地域教育が有効でないことを意味するものではない。就職後に影響を与えている可能性はある。地域教育の意義を明らかにするために、卒業した社会人に対する地域教育の効果についての長期的影響調査を行った。

地域教育を長期にわたって行っていたある大学の一研究室に着目し、この研究室を卒業した卒後１年目から 16 年目までの社会人を対象に地域教育の影響を調べた。調査対象者はこの研究室を卒業した 201 名の中で連絡可能な 172 名（年齢 22～40 歳）である。質問紙調査に対し 148 名から回答があった。その中の 123 名が同研究室での地域活動を通して学びがあったと回答していた。ただし学びがあったという回答は、単発ではなく継続的な地域活動を通してものであった。学んだことで役立っていると思うことを自由記述によって回答してもらった。それを構造的トピックモデルによって分析した。その結果、Topic 1(他者の話を聞くことの重要性)、Topic 2（地域の人と課題解決した経験）、Topic 3（報告・連絡・相談（コミュニケーション）の重要性）、Topic 4（地域の魅力発見とその可視化経験）、Topic 5（地域についての深い理解）という５つのトピックが抽出され、これらが社会人となった後に地域教育の効果として顕在化していた。トピックに卒業後年数依存性があるかどうかを調べた。重回帰分析の結果、Topic 3 と 4 について卒業後の年数について有意差が認められた。社会人としての新人の時期は Topic 3 のコミュニケーションという実践的スキルを重要する傾向があったが、社会人経験を増していく中で、地域活動で学んだ発見力と可視化のスキルを重視するようになることがわかった。

地域教育は就職先の選択には影響を与えないものの、トピック分析から、学生時代の継続的な地域活動で学んだことは、ここで述べた５つのトピックとして学生に内在化され、それが社会人として働く上で影響を与えていることがわかった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 Tsumagari Tatsuya、Nakazato Yoko、Tsumagari Takashi	４．巻 3
２．論文標題 Analysis of College Students’ Career Awareness after Taking First-Year Career Courses Using the Structural Topic Model	５．発行年 2023年
３．雑誌名 IIAI Letters on Institutional Research	６．最初と最後の頁 1～8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.52731/lir.v003.098	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 中里陽子，津曲達也，津曲隆	４．巻 7
２．論文標題 大学における地域密着型教育の受講経験が卒業後に与える影響に関する予備的検討	５．発行年 2024年
３．雑誌名 鹿児島大学総合教育機構紀要	６．最初と最後の頁 21-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Tatsuya Tsumagari, Yoko Nakazato and Takashi Tsumagari	４．巻 1
２．論文標題 Student’s Interests and Career Understanding: A Topic Analysis of First-year Career Courses	５．発行年 2022年
３．雑誌名 IIAI Letters on Institutional Research	６．最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.52731/lir.v001.013	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 中里陽子、津曲達也、津曲隆	４．巻 6
２．論文標題 大学生の地元就職への地域教育の影響と就職地決定要因	５．発行年 2023年
３．雑誌名 鹿児島大学総合教育機構紀要	６．最初と最後の頁 14-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 中里陽子、津曲達也、津曲隆	４．巻 70
２．論文標題 初年次大学生が関心を持つキャリア教育： 高校時代の意識及び行動タイプ別にみた分析	５．発行年 2023年
３．雑誌名 第70回九州地区大学教育研究協議会発表論文集	６．最初と最後の頁 20-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Tatsuya Tsumagari, Yoko Nakazato and Takashi Tsumagari	４．巻 10
２．論文標題 Analysis of the Actual State of Learning through Career Education as First-Year Experience Using a Topic Model	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Proceeding of 10th IIAI International Congress on Advanced Applied Informatics	６．最初と最後の頁 938-939
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 津曲達也，中里陽子，津曲隆	４．巻 69
２．論文標題 初年次キャリア教育科目を受講した大学1年生のキャリア意識の 自由記述レポート分析による考察	５．発行年 2022年
３．雑誌名 第６９回九州地区大学教育研究協議会発表論文集	６．最初と最後の頁 64-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　3件）

１．発表者名 Tatsuya Tsumagari, Yoko Nakazato and Takashi Tsumagari
２．発表標題 Student’s Interests and Career Understanding: A Topic Analysis of First-year Career Courses
３．学会等名 12th IIAI International Congress on Advanced Applied Informatics（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Tatsuya Tsumagari, Yoko Nakazato and Takashi Tsumagari
２．発表標題 Analysis of College Students’ Career Awareness after Taking First-Year Career Courses Using the Structural Topic Model
３．学会等名 14th IIAI International Congress on Advanced Applied Informatics（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Tatsuya Tsumagari, Yoko Nakazato and Takashi Tsumagari
２．発表標題 Analysis of the Actual State of Learning through Career Education as First-Year Experience Using a Topic Model
３．学会等名 10th IIAI International Congress on Advanced Applied Informatics（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 津曲達也，中里陽子，津曲隆
２．発表標題 初年次キャリア教育科目を受講した大学1年生のキャリア意識の 自由記述レポート分析による考察
３．学会等名 第６９回九州地区大学教育研究協議会
４．発表年 2021年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	津曲　達也 (Tsumagari Tatsuya) (50866621)	高崎経済大学・地域政策学部・准教授 (22301)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	中里　陽子 (Nakazato Yoko) (60644820)	鹿児島大学・総合科学域総合教育学系・講師 (17701)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関